



KOBE MONOGATARI

神戸の物語

緒方しげを NO. 18



ゴンチャロフのフルーツゼリー。



内容もパッケージも新しくなりました。



フルーティングココ

よく熟れた果実が、そっくりそのまま
爽やかで贅沢なデザートになりました。
少し大きめが嬉しいパーティサイズ。
メロン・オレンジ・グレープフルーツ・
ストロベリー・グレープの5種類。

KOBE
Goncharoff
ゴンチャロフ

Juehlein's
Für große und kleine Feinschmecker
Naha, Frankfurt am Main
Seit 1881

さしあげたいな、夏のときめき。
ユーハイムの ちょっと素敵なひととき。



さわやかなリゾートの風、心地よい光のシャワー……。

目ではとらえられないけれど、の方にさしあげたいのはそんな心がなごみ、ときめくもの…。ユーハイムのサマー・ギフト・コレクションは、涼しさあふれる自然の風と幸せ気分を運ぶおいしさを選びました。

あなたの大切な方に、ちょっと素敵な気分をお届けします。

ユーハイム

藍のそよ風が 吹きぬける。



新・夏の暮らし

●●6月23日(火)まで
5階リビングフロア

夏にこそたっぷりと。
藍の涼やかな魅力を
そして、やさしさ。
そして、やさしさ。
夏にこそたっぷりと。

中でも藍色の涼しい色彩は
新しい日本の暮らしに
驚くほど新鮮に映ります。
部屋を微風がスーっと
吹きぬけてゆくような心地よさ。
日本のかな魅力を
つくりあげるのは
季節感を大切にした
日本の涼。

暑さを忘れるひとときを

つくりあげるのは

季節感を大切にした

日本の涼。



DAIMARU KOBE
TEL(078)331-8121

④ 染めつけの器、藍の布、ガラス……。
どれもさわやかさ、ひときわです。
夏の味を涼しく見せる素敵な仲間
と、くつろぎのひとときを。



- 藍の布(30×88cm) 40,000円
古染古伊万里写し
岩鳥8寸皿 3,300円
- イガ焼染付呉須巻小皿(13cm) 900円

■ 5階和食器売場

④ 涼しげなれんに浮かぶトンボ。
まつ赤な夏の夕日を背景に飛んでゆく
あの懐かしさが甦ります。

- のれん(150×92cm) 45,000円

■ 5階カーテン売場

④

陶枕で、ひんやりと。たまには夕暮れ
近くまでお昼寝ね、というのもいいもの
ですね。

- 陶枕

④ (B) 6,800円 (A) 10,000円 (C) 2,000円

■ 5階寝具売場



海の見える白いチャペルでウェディング。

御結婚披露宴・

各種パーティー

好評予約受付中



海を見ながら、神戸ならではのファッショナブルなブライダルは、恋人たちの夢。

白亜のチャペルに続くホールでのご披露宴や、劇場を利用した世界で初めての
シアターウェディングなど、感動的シーンの演出を心がけています。

カリヨンの音色に祝福されて、慶びもいよいよクライマックスに――。

ゴーフル ポートピア88
ポートライナー中埠頭駅前
(ゴーフル白いチャペル前)



ゴーフル ポートピア88

神戸 月堂 港島

ミナトニ ゴーフル

〒650 神戸市中央区港島中町7-2-2 ☎(078)302-5555

本社／〒650 神戸市中央区元町通3丁目3番10号 ☎(078)321-5555

これは神戸を愛する人々の雑誌です
あなたの暮らしに楽しい夢をおくる
神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ
これは神戸っ子の心の手帖です

6月号目次 1987・No.314

表紙／小磯良平

神戸っ子'87／鶴殿洋子・弘中謙

ある集い／①佳生流②未生流(魔家) -

コウベスマップ／メリケンパークオーブン・ロイヤルブル

リンセス来港

美の小箱／⑥梶滋／文・赤根和生

神戸の物語／カメラ・緒方しげを

わたしの意見／緒方学

随想／井上一・富士田じつ子・藤原康邦

連載エッセイ／島京子・カット／早川良雄

こうべ味な旅／若杉光夫

KOBE音楽夜話26／「笛ひとすじ」藤舎推峰

珈琲飲みながら・椎名誠

地域文化論／水谷頼介

インタビュー／永田耕衣先生米寿記念

キャンベーン座談会／「国際交流」

地域文化論／武田則明

経済ポケットジャーナル

(特集)「エトランゼとバール」

話題のひろば／①映画記念碑バーティー②神戸開港120

年記念式典開催③兵庫オリエンタル協会発足④第一回手

づくり洋菓子コンテスト⑤世界女子学生会議聞く

KOBEファッショントレンド

神戸のお嬢さん／有本澄子・由紀・太刀川淳子

ファッショントレンド／MONTE OVEST

山西真理

もっさんのHYOGO WALK54／だんじり作り・梶

内照弘さん

ブロフエッサーPの研究室／岡田淳

コヒーブレイク

動物園飼育日記28／亀井一成

小山乃里子の華麗なる男のインタビュー／山田久志

神戸の集いから

スポーツエッセイ／「ゴルフ」石野順子

ルックスボーッ

神戸を福祉の町に／橋本明

有馬歳時記

出会いの旅／「モロッコとの10年目の出会い」板東慧

神戸百店会だより

K・F・Sニュース

びつといん

ボケットジャーナル

神戸・発見⑥／軒上泊

KOBE MODERN CULTURE

シネマ試写室／淀川長治

海船港／メリケンパークオーブン

メラ／米田定蔵・池田年夫・松原卓也

ビデオアート／山口勝弘

出会いの旅／モロッコとの10年目の出会い

板東慧

KOBE ハイカラ文化史④／鈴木正幸・鈴木正幸

シネマ試写室／淀川長治

海船港／メリケンパークオーブン

メラ／米田定蔵・池田年夫・松原卓也

第3回 納涼船上パーティへのお誘い
ラテン・ミュージック・ナイト
“サンバ デ クルージング”

7/26 P.M.6:00~
 (日)P.M.8:30
『やえしほ丸』
 1800トン

のりば 中突提ポートタワー南200M



今年は開港120周年にあたりメリケンパークは神戸海洋博物館や映画記念碑など新名所ができました。今回は淡路フェリーの観光チャーター船“やえしほ丸”での絶対楽しい船上パーティ。

大人／男性 ¥10,000

女性 ¥ 8,000

中高生 ¥ 5,000

●折詰弁当とフリードリンク(ビール・水割り・ジュース)
 スナック・おつまみは船内にて1品¥200~UPを別途
 有料販売させていただきます。

演奏 安藤義則トリオ (P. 安藤 Pr. 内藤 弘 B. 吹田善仁
 片岡 学 トランペット 江森嘉昭 アルトサックス
 松田年宏 ギター 滝えり子 ボーカル

出演 コパカバーナ専属の
 本場のダンサーとパーカッション
 神戸っ子サンバチーム15名

ALBATROSS
神戸アルバトロス
 神戸市中央区中山手通1丁目22-10
 ソウビル2F
 TEL (078)231-3300・242-1920

●後援／月刊神戸っ子
 コパカバーナ
 サントノーレ
 神戸っ子俱楽部

チケットのお申込み／神戸アルバトロス／神戸市中央区中山手通1-22-10 ソウビル2F ☎231-3300 滝まで



感性のステージ ファッションパーク。

新宿・高野
BONFUKAYA
ゲルラン
ココ山岡
VICKY
LEE SOPHY
ELLE
アベニュー22
ブライダルサロン・レーブル
ダイアナ
サイズショップ・ダイアナ
OFU
CLAUDE LEMA
ZAZIE
三愛

FASHION PARK

神戸・三宮さんプラザ センタープラザ3F

営業時間 am11:00 - pm8:00
PHONE 078/332/1698

マジー アストラル



FRANÇOIS DE VILLAC
PARIS

パリで生まれた星座の香り。

オードトフレ

男性用は黒

女性用は白の衣装をまとって

12星座の香りが

デビューしました。

パリのエスプリが創った、

神秘の香り。

の方へ

素敵な送り物です。

la moda nobilita
Sanohe

本店 <元町2丁目> TEL 331-4707

ヌーベルサノヘ <元町1番街> TEL 321-1710

トアロード店 TEL 331-1952

日本総販売元 有限会社 タック ジャパン 〒550 大阪市西本町1丁目5-3 扶桑ビル ☎ (06) 536-5057

☆私の意見

個性化を進めて 神戸の観光の 増大を図りたい

緒 方 学

△神戸市経済局長▽



北野に「風見鶏の館」がオープンして、今年で10年を迎えます。その間、神戸を訪れる観光客も年々増加し、現在では、年間160万人から、170万人の人々が、北野界隈に足を運んでいると聞いています。

北野界隈が多くの観光客を集めているというのは、北野が持つている個性・特性が観光客に理解されているせいだと思います。今回、北野界隈と港を結びつけるループバスを、開港120年を記念して走らせました。北と南に回遊性を持たせることにより、観光とショッピングが一体化し、山と海の観光拠点が繋ることを期待しています。今度のメリケンパークの完成は、海に向かっての、その切り口になることでしょう。神戸の街にとって、神戸港が今まで神戸の経済を支え、市民生活を支えてきたのは、数字的に明らかです。しかし、産業港としての神戸港の役割が、今まで非常に大きかったために、市民との交わりが若干欠けていました。そういう所に、メリケンパークが完成し、市民の方々が訪れる事によって、親近感が生まれることを信じています。

現代は、あらゆる面が重厚長大から、軽薄短小に変わつてきつあります。そういう個性化の時代を迎えて観光が持つている産業的な意味も見逃せません。そういう意味で、神戸の観光を、より飛躍させるために、何か大きな観光拠点を考えて行く必要があります。

いわゆる大規模集客施設・レジャーランドのようなものが、神戸には必要ではないか。それから、もっと海の方に眼を向ける必要があるんではないか。この2つの点が、これから神戸の観光を振興するための、大きなキーポイントであると言えるでしょう。

港の産業港としての機能は、六甲アイランド・ポートアイランド等で近代化を進めてもらつて、やや老朽化した施設は、市民のいこいの場所として開放してみたいとも考えています。そして、どこにでもあるものではなく、神戸らしい施設を作り、個性化を進め、アイデンティティーを確立して行かなくてはならないと思っています。

'87 VACANCE NEW MODE



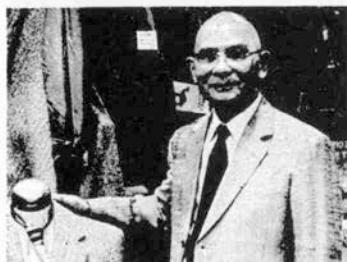
美容室 **エリザベス**

本店 / 神戸市中央区三宮町2丁目6-4(三上ビル)
TEL (078) 331-8894・4917

お貸衣裳 花嫁衣裳サロン

東京・遠藤波津子直流 周西唯一人者 畑尾美久子の店
一本店と同じ(三上ビル) — 神戸市中央区三宮町2丁目6-4
TEL (078) 331-3258

ハイセンスな紳士服で
最高のおしゃれを



三恵洋服店

神戸・元町4丁目 TEL (078) 341-7290

隨想



絵／井上一

祭り

井上

一

△日本画家△

人間が地球に生存するよう
になってから人は神を賛美
し、毎年日本では春・夏・秋
冬に応じて出来た作物、また
海の産物を神前に捧げ、神に
感謝と祈りを捧げて次の作物
豊作と大漁とを祈願する。

自作の絵の前で井上一さん

昔より神と人とのつながり
は、きつてもきれない関係が
生活の中に深く入っている。
凶作であれば豊作を祈り、ま
た雨乞いを神に祈ることによ
つて生活が豊かになるように
あるいは病気があれば早く治
るよう神に願いをする。また
子供が生れると健やかに育
つようなど神に祈願をする。
聖書にも神に十分の一を捧げ
て神を賛美しなさいとある。
踊りを行なつて魂をしづめ
る、その踊りは土地によって
異なり、その衣装も異なる。
人間は何かにつけて朝な夕な
にその日の感謝を捧げる。朝
は日輪を押し、一日の仕事、
健康を祈る自然信仰は昔より

土によって山車もことなり、
だんだんと美しい山車が造ら
れるようになって来た。悲し
い事柄を忘れて、前向きに生
活をしようとする人間の心の
よりどころとなつた。神事は

神幸式を行い、村を巡つて幸
せを人々に与える。

人々はみこしをかつぎ汗し
て村の祭りをよろこぶ。村人
は祭りが来る日を待ちこがれ
てその日を待つ。小さい頃祭
りばやしが聞こえる頃になる
と何か落ちつかず、親にまつ
りにつれていつてもらつたの
は大人になつても忘れがたい
想い出となる。

大人になつても、その頃の

現在にいたるまで行なわれて
いる。長崎おくんち、岩手県
のしかおどり、京都の祇園ま
つりと有名な祭りがあるが、
それぞれの行事は魂をしづ
め、人に幸があるようと祈
る踊りであり神社の神事でも
ある。

事を想うとなつかしく思う。秋祭りは各地で行われるが、村人が一つになつて行なうさまはほんとに美しい。

人の心も欲をはなれてまつりに奉仕をしている間、目も澄んでいる。洗練されたさまは神にささげている。清い状態である。

赤ちゃんのよう、全身によろこびが溢れている。文明社会にあっても、各地に見るまつりを見るにつけ身が清められるような気がする。このまつりがいつまでもなくならないで続けられることをのぞむ一人である。

フイルター

富士田じつ子

△書欄編集長



本当に囲まれてくらしています。日に百数十点発行される書籍の中から、毎月数十冊を選んで紹介するのが私の仕事。趣味が読書というのではなく、つまり無趣味のことだという

話を聞いたことがある。それでも趣味はと問われれば読書と答えてしまう。

ページを開くたびに見知らぬ世界がひらけるのが楽しくて夢中で読みちらかした小学生時代。友人の話す海外の作家名や作品名を知らないというのが恥ずかしいというだけで、内容もわからぬまま翻訳物に挑戦した中学時代。数学や物理より小説を読んで方がずっと楽、と毎日図書室に通った高校時代……。

幸か不幸か活字嫌いになることなく今日に至っている。読みたくなくなれば、途中であっても読むのを中止してしまっていいという状況に常にあつたのがよかつたのではなかと思つていて。

書棚にズラリと並んだ本の背を見て歩くのが好きだ。視線(?)があつた本の前に止まり手をのばす。パラパラッとめくつて、相性があわないところ元の位置へ。こういう作業を何度も繰り返した後、気があつた本だけが我が家にやってくる。

しかし、読む段階になると

又別の相性、時というのが存在するようだ。積ん読の本が増えるのも仕方ないと思つてゐる。時が来れば、本の方からおよびかかるであろうから。

本を選ぶ時、好きな作家の新刊は中味も確かめないで即、買う。新聞、雑誌、マスコミ等で話題になつてゐる本も気になる。「有名人」が選んだ本、という企画がよくあるが、選ばれた本を見ることによって、その人の意外な一面が見えたりして、こういう記事を読むのは結構好きだ。ただ気をつけたいのは、こういうきつかけで本を選んだ場合、既に新聞の書評というフィルターをひとつはさんでその本と対峙することになつてゐること。先入感といふものではやつかいないものでなかなか拭いがたい。

何もない所で出会つていれば全く逆の感想をもつことだけであるに違ひない。

しかし、すべての本に一対一で向きあうなんて無理な話。交通整理の役割をしてくれるものが必要です。できる

だけ透明でありながら、ある種のポリシーという網の目をもつフィルター。

そんなフィルターになれたら素敵だなと思っている。

モノのイベント よりも、人と人の共感の市場に注目

藤原康邦

ハイイベントプロデューサー▼

近年博覧会がポートピア'81

以降、続々と開催、そして又、計画されています。基本的な考え方としてはよいのかも知りませんが、このあと一九九〇年前後で全国三十八九都市が各市周年事業として、それぞれの地方博クラスを打ち出され、どうも私の考えたイベント未来とは違うようなので書いてみました。

これら計画中、進行中の内容は一種のフレーム（会場の中）で開催され、そこに入人々がつどい共感、喜び、感動の提供を行うというもの……これが基本構想です。

ここで日本人にとっての祭りつまりイベントの原点を考えるならば、ハレ：正月、お盆のような年に数回の楽し

み。ケ：日常のことです。みんなハレの日を楽しみにせつせとはたらくわけです。

いま日本人は、コウベの人々も含めてハレの日が日常になってしまって、ハレハレの毎日なので、次な

は刺激を求めるようになつてきたりします。きわどいもの、スリルのあること。人ではなく、人とモノ、またモノとモノ、ふれ合いに安堵感を感じてしまい、あぶないあぶない。

僕の突然の結論です。市場です。人と人とのふれ合いかさりげなく、わすれていた、本来あるべきのはずの新鮮な刺激が、新鮮なさかなや野菜とともに息付いています。そして路地角で人々が語り

合い、ふれ合い、自然なパフォーマンスが演じられ、みる人がふえ、それを聞いた隣町の人たちが「おもしろそうだな！」と足をはこびます。

食を提供する人が発生し、ハレのための小道具や、いろんな人たちがひとによって構成され、必要なものがあとに造られてゆきます。

市場はそのような形態で生してきました。そして神社仏閣が年数回のハレならば、市場とは、ほぼ日常に近いハレの空間になるでしょう。

そのような目で神戸、そして周辺の市場をみてみませんか？たしかに大型店の進出等により、少々さびれた感じの市場はありますが、今言つたような活気のある市場もまだまだ存在します。

世界的にみて、日本とアジアの時代、日本とアジアが手をつなぐ時代と言われる現在の中国、香港、タイ、シンガポール、どこへ行つても市場が元気はところは、住民も元氣です。

ぜひ、コウベの市場も注目してはいかがですか？



パウ・プランニング事務所で

□エッセイ

食について

—江維娜さんに聞く(その二)

島 京子

絵／早川良雄



連休の初日、江維娜(こう・いな)さんが来たので

「どこか、行ってみたいところはありませんか」
水を向けると、植物園があれば行きたい、との

ことだった。

須磨の一の谷辺りにある、植物園へは、もう行
つたというので、再度山の奥の高山植物園へ行く
ことにする。

一日寝ていたい、という息子を案内人に決め、
しばらく江さんに待ってもらい、いそいでおにぎ
りをつくる。ウメボシ、ケズリブシ、ウニを入れ
俵型にぎり、のりを巻く。のりがなくなつて、
白いままのおにぎりもあつた。

案内人は、いつもならばテコでも動かぬのだ
が、江さんのためなら仕方なし、ガソリンコンロ

をバッグにつめている。

天気はよく、萌え出したばかりの新しい緑が、
ここを浮き立たせる。

植物園は、家族づれで賑わっていたが、思つて
いたほどの混雑もなく、ちょうどころあいの人出
であつた。

前回も書いたが、江さんは上海の華東師範大学
・社会学科教師で、交換留学生として神戸の女子
大の寮に居住している。三十一歳。
広い芝生の一隅の木陰で、私たちは持参のビニ
ールシートをひろげ、腰を下した。
コンロでウーロン茶を沸かし、弁当をひろげた。
「これ、買ってきましたのですか」

江さんが聞く。
「さつき、作つたの、これダシマキっていうんだ

けど、ていねいに焼いたから、食べてみて

おにぎりのほかは、ダシマキと、これも黄色のタクアンだけで、弁当にしては淋しい。

江さんは、のりを巻かぬ、ウメボシ入りのおにぎりを食べ、ウーロン茶を飲んだ。

「これ、食べて」

私のすすめにもかかわらず、江さんはほかのものは食べない。

聞けば、中国には“弁当”という言葉はない由であつた。

「日本の学生、よく弁当持つてきて食べています。中国では、食堂で食べる。ギョーザやシューマイなどの点心（軽食）でも外では食べない」そういえば、中国の街すじで、麺や肉まんが、湯気を立てながら売られているが、人々は、みなその場で、温かいものを食べている様子であった。これはテレビからの知識だが。

江さんが、日本に来て、一番おどろいたのは、冬でも子供たちがアイスクリームやアイスステイツクを食べている現実に対してだった。

「中国では、子供に冷たいものを食べさせる親はいません。子供の胃の健康にわるいです。おとなも食べません」

水も飲まぬ。沸かして湯を飲む。

「広州では、最高気温が三十九度にもなるときがありますが、みな冷たいもの食べない。朝はおかゆか雑炊に漬物、焼いたパン、大餅（ターピン）など食べます。暑いときに熱いものを食べて、汗を出して涼しくなります」

夏に熱いものを食べて、暑氣ばらいをする風習は日本にもあった。

「そうですか、漢民族ほか共和国の人々は、温食民族なんですね」

弁当は冷たいものだ。江さんは我慢して、やつとウメボシおにぎりを食べたのだ。

「寮のおかずはどうですか。お口にありますか」聞くと、江さんはあっさりと言った。

「まあまあです。あまり口にあいません」

毎日のことで困るだろう。

「自分で作らせてほしい、と頼んだのですが、みなと同じもの食べるのが規則だ、と断わられました」

はじめて、江さんがわが家にみえたとき、酒の肴に、イクラと大根おろし、すし、焼き魚などでもてなそうとしたが、どれも江さんの口にはあわなかつたはずだ。冷たいもの、生まのものばかりだった。

「このあいだ北朝鮮共和国の女性が来られて、一しょにごはんを食べたけれど、まったく同じもの食べる。生ま野菜、サシミも、酢のものも——」「はあ、そうですか」

中国料理のすべてを、日本人は食べるが、日本料理の何割ぐらいを中国の人は食べられるのか。

この次、江さんに材料から選んでもらい、中国の家庭料理を作つてもらう約束をした。たのしみである。

新緑が映え、山つつじが色どりをそえる植物園で、江維娜さんは、熱いウーロン茶を何バイもおかげりして飲んだ。

△筆者紹介

一九二六年神戸生まれ。一九六五年「渴不飲益泉水」で第54回芥川賞候補。「一九六八年『逃げた』で第一回三洋新人賞受賞。『VIKING』同人。著書に『夜の訪れ』『母子幻想』『墳事雜記』等。

アイ・ラブ・コウベ

若杉光夫 (映画監督)

神戸市と神戸市教育委員会が作られる同和問題についての映画を担当はじめ、もう十年を越えた。七夕さまのように、年に一度は神戸にゆく。厳密に言うと一作品につき、三度か四度は必ず伺うことになるのだから、これはもう準市民みたいなものだ。大体、うちのかみさん(南風洋子)は神戸育ちだし、実弟(若杉憲一)の神戸住まいも永いから、神戸のことは大体、他人ごとではなかった。しかし、十年の余通いつめたということになると、神戸市の変化を肌で感ずるような所があつて、おまけに仕事の関係上、行くたびに神戸中を走りまわってロケ地を探すものだから、本物の神戸っ子も知らないような所も、意外と知っているのかもしれない。須磨寺で聞かせていただいた一弦琴とか、東出町・稻荷市場の横にあるピリケンさん。運動公園にあるテニス・コート。(これは実に素晴らしい)兵庫の港の昔懐いたたずまい。書き始めるときりがないが、第一作のロケーションの頃から考えてみると神戸の町は全く美しい変貌ぶりなのである。第二作で紹介した異人館群はいつの間にやら若者たちのメッカとなり、名谷に始めて行った時には、地下鉄の駅しかなかつ

た。最近こしらえた『ウエディング・ソングがきこえてくる』で伺った時には又々神戸中が堀りかえされているような気がした。正直言つて、まだやるのつていう感じなのである。凄い活気なのである。しかも、どこかしつとりと落着いていて、町の伝統と誇りのようなものを、どこに行つても、誰に会つても感じてしまうのは何故だろう。まるで、外國の町のようなポート・アイランドがあるかと思えば、新開地や灘、垂水、やたら人間臭い巷も残つていて、永住しているわけではないから印象の域を出ないのだが、住むならば神戸と、ぼくもかみさんも弟も思つてゐる。

ほとんど仕事で行つてゐるわけで、朝早くから夜おそくまで(時には深夜に至る)『用意ハイツ』と号令をかけているだけだから夜の町のことは良く知らない。たいてい疲れ果てて、小さな宿の小さな部屋でドスン、グウなのである。飲むとすれば、スタッフのある部屋が必らずサロンとなつて、談論風発、みるみる焼酎の瓶が空になる。

それにしてもコーヒーのうまい町である。どんな店にはいっても、先ず間違いない。東京で余りにもひどいコーヒーに当りすぎるせいでもあろうか、店にはいって漂つてくるコーヒーの香りはたまらない。何も“にしむら”に行かなくてもいいのである。(誤解のないように言つておくが、“にしむら”的のコーヒーがまずいと言つてゐるのではない。)

たまにおごつてステーキ・パティをひらくが、これはトーア・ロードのグリル・青山にきまつてゐる。息子さんが目の前で焼いてくれるのは別に珍しいことでもないが、仕事中心で、食生活

は殆んど無視されるロケーションとあってみれば、こたえられないうまさである。このお店、実はわが劇団民芸の神戸・芦屋の後援会の事務所を引き受け下さっており、恐らくこまごまとした雑用を多忙の中でこなしておられると思えば、間違つても他のお店には行けないのである。世の中は

勿論だが、映画も舞台も詮じつめれば義理と人情ではないか。などとくだをまいてると、これ又うまいコーヒーが出てくるのだから嬉しい。尚、蛇足ながらこのお店のパンはうまい。鉄板の余熱でこれ又目の前で焼いてくれるから、ゆめゆめライスなど注文しない方がいい。(とぼくは思う)

もつとご馳走しなければならぬお客さまのある時には、東門街の古もんへ行く。ここにしやぶしやぶは絶品だが、このお店のしつらえが又凝っている。値打ちのほどはわからないが、何だか古美術館か民芸館かの中で飯を喰っているような、それでいてちつともせせこましい感じはない。何百年かタイム・スリップしたようなどやかな氣分で日本酒を飲む。まるで神戸ではないのだが、まがうことなき神戸なのである。

兵庫の港のそばでロケをした時、昔懐しい食堂に出会った。ガラスのケースの中にさまざまなおかずがならんでいて、味噌汁あり豚汁あり、御飯に大中小あり、どれもこれもうまそうで思わず幾皿もテーブルにならべて歓声を上げる单调な外食生活の中でこんな嬉しいことはない。とても食べきれないで少しずつ残すのだが、それでもいささか食べすぎてしまう。午後の撮影は今食ってきた昼飯の話でもちきり。そういうお店が何軒もあるて、土地の人に聞いて、もつとうまい店、もつと安い店と毎日毎日食べて歩いて呉せなことであった。ともあれ、神戸の思い出もたまりにたまつた。そして又来年も訪ねるわけだが、今度も又、市役所前のラーメンやさんでうまいワンタンメンを食うことになるだろう。楽しみなことである。

(筆者紹介)一九三二年大分県別府市生まれ。七高等学校法学科を経て、四七年京都大学撮影所に入社。五一年劇団民芸演出部に入団。現在に至る。主な作品に「唐人お吉」「夜あけ朝あけ」「風立ちぬ」等。その早撤りには定評がある。その他十数年前から



左上／映画『ウエディング・ソングがきこえてくる』より吉宮君子、平栗あつみ、辻靖美（左から）
左下／演技指導する著者（右より二人目）右／主人公・松村直子役の平栗あつみ、恋人・室井謙介役の長谷川初範



（筆者紹介）一九三二年大分県別府市生まれ。七高等学校法学科を経て、四七年京都大学撮影所に入社。五一年劇団民芸演出部に入団。現在に至る。主な作品に「唐人お吉」「夜あけ朝あけ」「風立ちぬ」等。その早撤りには定評がある。その他十数年前から

笛ひとすじ

藤舎 推峰（横笛奏者）

私と神戸との深い付き合いのきっかけとなつたのは、今から十五年ほど前のことです。

演出家でもいらっしゃる岡田美代さんの紹介でモダンバレーの今岡頌子さんと、一度即興舞奏をしてみませんかと、岡田さんより云われ、私は今まで、古典の世界とジャズの世界でしか吹いたことのない人間として、バレーと即興して、果たしてうまく行くかな……と思い、とまどっていました。でも、『新しい出会い』ですので、引き受けることにしました。

たしか、タイトルは『レモンの月』だったと思します。場所は神戸国際会館です。岡田さんより今岡さんを紹介されました時の印象は、とても細い、スタイルの良い美人でした。

さて、幕が開き、初めは私のソロがあり、そのうち今岡さんが登場して、私と今岡さんの付き離れずといったようなねらい合があります。最後二人は、すごく激しい音と舞の世界となり、私は興奮のあまり、ステージで一回転トンボをきり、幕となりました。終わって、岡田さんが樂屋へ飛んできて、

「推峰さんすごかつたわね……」

といい、私は良いか悪いかといったことは、まったく自分自身わかりませんでした。これが神戸

との出会いです。

それから京都の花背の里へ、惟喬親王と、在原業平の故事から、『雪中に咲く杜若』の因縁の不思議さを作品にと、岡田、今岡さんと、紫の雪のドレスを創った藤本ハルミさんらと出掛けたときのことです。

残雪に咲く杜若は美しく愛らしいのですが、その根の力強い凄さに打たれ、人間も表だけで咲くのではなく、心の中に反対のものがあつてこそ咲くのだなと、芸術のルーツを見た想いがしました。そして美しい曲想に根づく重さを表現したいと『雪の杜若』を作曲したのです。

その後、女性書道家の望月美佐さんと、神戸とソビエト（リガ市）との姉妹都市でソビエトへ行き、二人の芸のフュージョンが始まりました。書をかかれる早い一瞬の間にどのように吹くか、まるで剣道をしている反射力のようでした。望月さんも、笛が鳴っていない空間に流れる早さで書かれます。字のすばらしさ、今でも時々試合をいたします。芸というものはほんとうにむづかしく、最近つくづく思い悩みます。我々二人だけが感動しても見ているがわ、聴いているがわの気持ちがなかなかつかめません。又、芸をやっている側からは『芸の術』、いわゆる見、聴きしている側に麻酔を





「翅」昭和54年11月1日東京草月ホールにて／今岡頌子＜左＞と藤舎推峰



藤舎推峰 (とうしゃすいはう)

横笛奏者。本名は中川勲。昭和16年東京生まれ。父は藤舎流笛家元、藤舎秀蔵。4歳の時、京都に移り、6歳頃より笛の手ほどきを父より受ける。今年3月、音楽之友社より著書「笛ひとすじ」を出版。内海俊照・武原はん・日野皓正・福原百之助といった異色の顔合わせによる対談など、興味深い。

話しは神戸に帰りますが、食べ物、洋服、そして、芸術家のたくさんいらっしゃる町です。とってもおしゃれな町で、常に燃えている調和のとれたすばらしい町です。私は大好きです。私も一度神戸でリサイタルでも開きたいと思っています。その節には神戸の皆さん、よろしくお願ひいたします。

最近、デザイナーのコシノ・ジュンコさんと何となく会い、芸論をしました。彼女いわく、「推峰さんの世界も大へんだけれど、私なんか今作つたものは、明日になればもう古くなっているのよ。その点、推峰さんが同じ曲を二日続けて吹いても、一日目と二日目が全然ちがつた曲に聞こえるでしょう。だから、推峰さんはいいわねえ。」といいました。たしかにデザイナーの世界は一分一秒で変ります。そして、形として残ります。ある意味で、残るよさ、私のように瞬間に消えるよさ、どちらがよいかは長短あると思っています。二人は夜おそらく話しつづけ、いつの間にか、いねむりをしていました。

かけなければなりません。酔のかららない芸は芸術とは言いません。私はこのことで、常に私の吹く笛の世界へ導くことを頭におき、吹いております。